

## 生活

昨年12月に全国の小中学生を対象にスタートした「ジュニア防災検定」(防災検定協会主催、内閣府、国交省など後援)。来月6日の第2回の試験を前に、綜合警備保障(ALSOK)の青山幸恭社長(60)と平野啓子・防災検定協会理事長(53)が子供たちの防災教育のあり方について対談した。警備のプロである青山社長は「防犯と防災は同じで、自助が大切」と話し、訓練を含めた防災教育の大切さを訴えた。

写真 早坂洋祐 文 藤浦淳

平野 私たち、和歌山つながりがあります。私は大津波から人命を救った広川町の「稻むらの火」や串本町の物語を「語り部」として伝え続けています。

青山 私は平成7年から2年間、旧大蔵省から和歌山県警本部長に出向していました。阪神大震災直後だったので、防災、減災についてはそれ以降、頭にこびりついています。和歌山では稻むらの火の話も学校で教えていた。昨今言われる「国土強靭化」のモデルのような所が和歌山県ですね。



综合警備保障  
(ALSOK)社長  
青山幸恭氏

〈あおやま・ゆきやす〉昭和27年、神奈川県生まれ。50年、大蔵省(当時)入省、平成20年、综合警備保障入社。23年に最高執行責任者(COO)、24年から現職。

次さんは、とにかく「訓練」「訓練」とおっしゃっていました。慣れていないと何もできない。3・11(東日本大震災)で中学生が幼い子供たちを連れて津波から逃げ切った「釜石の奇跡」。ああいうことなんですね。普段の訓練や教育が役に立つというのは。

青山 今の警備業の実態は、110番と119番と一緒にやっているといえると思います。防犯と防災は車の両輪です。

平野 社会に対する責任感も強いと思います。地震についても、高知県などの地元、消防を含めて関係を築いているところです。

青山 東日本大震災被災地でも、被災者の後方支援



防災検定協会理事長  
平野啓子氏

〈ひらの・けいこ〉昭和35年、静岡県生まれ。NHKキャスターなどを経て、かたりすと(語り部)として活躍。平成20年、「第8回徳川夢声市民賞」受賞。現在、大阪芸術大学教授。

平野・ジュニア防災検定もまさにそこが狙いです。水が染み込むように社会に自助防災を染み込ませたい。試験だけでなく、事後課題では自分の町を歩いてもらったり。子供がやれば両親もやってくれる、そんな効果もあるんです。

さっぱりと  
ゴボウチ

# 「まず自助」の教育が大切

**ジュニア防災検定** 子供が普段から防災意識を持つ力を身に付けることを目的に、昨年始まった検定制度。初級・中級・上級の3段階で、それぞれ事前課題・当日の試験・事後課題の3つの総得点で合否が決まる。1回目は小学2年生から中学1年生まで約2000人が受検(初級、中級のみ)。第2回の個人受検申し込みは既に終了しているが、団体試験は随時受け付けている。詳しくは防災検定協会ホームページ(<http://www.jbk.jp.net/individual.html>)で。